



Title	〈文献紹介〉李炫珠著『新羅后妃制研究』
Author(s)	橋本, 繁
Citation	東アジア諸地域における王室儀礼比較史のための国際的研究基盤の構築 王室儀礼関連翻訳論文／調査報告. 2025, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文献紹介

李炫珠著『新羅后妃制研究』

(新書苑、ソウル、2024年、全286頁、24000ウォン)

橋本繁

<目次>

はじめに

1. 研究史の検討および研究方法
2. 研究方法と研究内容

1部 夫人称号の導入

1. 'ar' - 夫人史料の検討
2. 'ar' 系称号の起源と神聖性
3. 礼系称号と内礼夫人の職制的性格
4. 夫人称号の受容と遡及時期

2部 妃称号の登場と妃 - 夫人体系

1. 妃 - 夫人史料の検討
2. 夫人称号の拡大
3. 妹王の称号的性格
4. 妃 - 夫人の序列化

3部 后妃制の受容と王后 - 妃・夫人体系

1. 中代王后冊封と后妃制の受容
2. 唐の新羅王妃冊封と正妃概念の定立
3. 唐の新羅王大妃冊封と王母の位相

4部 新羅女性の制度的変遷

1. 后妃制の成立と運営
2. 女官制の成立と運営
3. 宗廟制の変遷と太后的位相

おわりに

著者の李炫珠氏は、新羅を中心として古代女性史を専門としており、2014年に「新羅王室女性の称号変遷研究」によって成均館大学校から博士号を取得した。現在は、亞洲大学校人文科学研究所・研究教授として在職している。

本書は、博士論文をはじめとするこれまでの研究成果をもとにした研究書である。新羅の王室女性の地位と役割について、上古期から下代まで通史的に扱っている。王の唯一の正式な配偶者としての地位を「王后」として確立したことなど、唐の后妃制を新羅の実状に合わせて受容した特徴を浮き彫りにしている。また、下代の王后・王妃が唐から冊封を

受けているのは、王位をめぐる激しい争いのなかで王位継承の正統性を示すためであったことなど、新羅王権そのものにも関わる后妃制の特質を明らかにしている。なお、本書の成果の一部については、「新羅の后妃制と女官制」（伴瀬明美ほか編『東アジアの後宮』勉誠出版、2023年）にみることができる。

このように本書は、これまでにない新羅王室女性の通史として大きな成果といえるが、不満に思われる点もあった。『三国史記』『三国遺事』や金石文などわずかな史料から立論せざるをえないなかで、史料の解釈や分析が不十分でやや恣意的と思われるところがあつたほか、史料に対する批判的観点が不足していると感じられた。例えば、初期記事において王室女性の人名としてみえる「閼英」「阿婁」など‘ar’系の名前や、「内礼」など礼系の名前について、いずれも「夫人」という漢字式の称号が入ってくる前の固有称号であったと理解した上で、前者は信仰・崇拜の対象、後者は司祭的な地位を意味したとする。しかし、そもそもこうした初期記事については、後世の造作の可能性を念頭に置いた厳密な史料批判が必要であろう。

また、「妃」や「王后」などの王室女性の地位の変化についても、「大王」号や骨品制についての韓国学界における通説的な理解を前提とした説明に止まっている。王室女性という著者独自の観点から従来の新羅史像に書き換えを迫るには至っていないことは、残念に思われた。

